

幕末国学言語論と国語学

一四二

山東 功

一．はじめに

保科孝一が一八九九（明治三〇）年に著した『国語学小史』は、日本における最初の「国語学史」概説書としてよく知られている。この中で、幕末の日本語研究に関して以下のような言及がある。

第四期は、如何なる状態にあつたかと申しますと、此時代は内外多事所謂兵馬倥偬の際でありまして、悠悠学事に日を送るといふことは出来ない。天下の志士皆蹶起して身を国事に委ねた時代でありました。故に學術の研究は其種類の如何を問はず、一般に衰微したのであります。殊に国学の如きは隱士の手に落ちて、殆ど世の中に顯はれない様になりました。明治維新の原動力は、たとへて国学の力興つて多きに居るとは申せ、此時代に於ては国学者の地位は全く萎靡して振はなかつたであります。

（保科（一八九九）三八三頁～三八四頁）

ここでいう「第四期の国語学」とは、日本語研究の歴史の区分における、橘守部以後明治十九年までの研究を指している。具体的な時代区分は「第一期 契沖以前の国語学、第二期 国語学勃興の時代（契沖より宣長まで）、第三期 国語学隆盛の時代（宣長以後守部まで）、第四期 国語学衰微の時代（守部以後明治十九年まで）、第五期 明治十九年以後（大学に博言学科をかれてより以後）」（保科（一八九九）一六頁）となっているが、

近世の日本語研究を国学の展開を「勃興・隆盛・衰微」と捉えた上での叙述であることがうかがえよう。この国学の展開という観点は、中野虎三が一八九七（明治三〇）年に著した『国学三遷史』にも見られ、ここでは「勃興・完成・衰移」となっている。いずれにせよ、幕末は国学にとつても、国語学にとつても、「衰微」の時代であつたということが主張されているのである。この「衰微」とされる時代の日本語研究として、『国語学小史』には十四名（足代弘訓、鹿持雅澄、鶴峯戊申、長野義言、鈴木重胤、萩原広道、中島広足、黒川春村、野々口隆正、物集高世、権田直助、堀秀成、高橋残夢、岡本保孝）の学者が取り上げられている。岡本保孝については、狩谷掖斎に師事したことから漢学者とすべきかも知れないが、清水浜臣にも師事したことから見ても国語とは縁が深く、また、他は全て国学者と称しても差し支えないだろう。

ところで、幕末の国語学を「衰微」の時代と見做すことは、保科の独創という訳ではない。そもそも保科の『国語学小史』は、中野の『国学三遷史』の記述に多くを拠っている。さらに、『国語学小史』刊行の数年前にあたる明治二九年度・明治三〇年度に、上田万年が帝国大学文科大前において「国語学史」の講義を行っているが、その講義録（新村出筆録）を見ると、以下のように保科と同様のまとめを行っている。

1863〔嘉永六年〕 亜米利加ノ船来リ、……徳川氏ノ根本アヤフクナレリ。之ヨリ、文芸 Decay〔衰微〕ニ入レリ。有力者ハ国事ニ奔

リシガ故二、学者ハ下レリ。

維新ニハ、無学者、漢学者〔ガ〕勢力ヲ有シタルニヨリ、勢力、語学者ニナシ。1850-1888(?)頃マデハ、衰微極マル。(中略)

堀秀成、権田直助(相州)、谷千生、野々口隆正、鈴木重胤、黒川春村(第二期ニ近シ。)

コレヲハ、社会ヨリ忘レラレタリ。(古田校訂(一九八四)一七七頁)

上田の場合も、「徳川氏時代国語学史上ノ三時期」として、本居宣長没年(一八〇一年)、橘守部没年(一八四九年)、明治維新(一八六九年)を挙げ、それぞれ「勃興・完成・衰微」の時代と総括している。保科の『国語学小史』は上田の講義録をそのまま出版したものであるとする見解も存在するが^①、細部において異なった記述箇所も多く、断言はできない。それよりも、近世国学が「勃興・完成(隆盛)・衰微」したとする認識の下、具体的には幕末国学のどのような側面が「衰微」と見なされることになったのか、注目する必要があるように思われる。とりわけ、日本語研究の歴史である「国語学史」編述において、近代以前における研究内容の取捨選択とその評価は、近代以降の「国語学」成立と不可分のものであると言える。

本稿は、『国語学小史』において「衰微」の時代と評された幕末の国学に関して、日本語研究の観点から注目すべき著述を取り上げ、国語学の成立において幕末の国学はいかなる意味を持っていたのか、考察を試みるものである^②。

二、幕末国学言語論への視点

上田万年の国語学史講義録において、先に引用した箇所では、幕末の国学者がほとんど取り上げられていなかったが、他の箇所での書き込み

等も含めて、講義録全体を見てみると、鶴峰戊申、物集高世、白井寛蔭、新井守村、岡本保孝らの名が挙げられていることが窺える^③。ただし、それらの著述内容等が一切触れられていないため、評価の対象はどういったものであったのかよく分からない。

一方、『国語学小史』で取り上げられた国学者については、鶴峰戊申『語学新書』、鹿持雅澄『万葉集古義』、中島広足『増補雅言集覧』が特に注目される他は、「もちろん一二の点に於ては、進歩したところがないではありませんが、全体としては幾何も進歩してないのであります。」(保科(一八九九)三八四頁)という調子で、ほとんど酷評に近い。たとえ注目される研究であっても、蘭文典をもとにした日本語文法書である『語学新書』に至っては、「要するに、戊申は日本語の研究には、余り深くなかつた様であります。極く浅薄なる研究を以て、蘭文典の法式を当てはめたものですから、不完全なることは素よりであります。然し一部に纏つた文典としてはエポックメイキングのものであらうと考へます。」(保科(一八九九)四〇八頁)としている。つまり、内容よりも、そうした研究の事実を取り上げたという趣旨である。そのようにして見ると、黒川春村、物集高世については、当時、帝国大学文科大学教授であった黒川真頼や物集高見の父にあたることから、明治期においても縁の深い国学者ということの一点で、言及すべき対象としたのかと、穿って見ることもできそうである^④。

さて、そうした酷評の続く時期において、研究の事実についての取り上げとともに、鹿持雅澄、鶴峰戊申、鈴木重胤、野々口隆正、堀秀成、高橋残夢らについては、彼らの音義説や言霊論(以下「音義言霊論」)への言及がなされている。この音義言霊論については時枝誠記が、一九四〇年に著した『国語学史』において、以下のように述べている。

この言霊なる思想は、近世国学の発展と共に再び復活し、その原始

的信仰に新たな意味が加へられ、近世末期に至つて特にそれが強調せられる様になつたのは、一方に国語研究の著しい発展によつて、国語に整然たる法則の存在することが発見せられ、言霊の力はかゝる言語によつて始めて生ずるものであるといふ風に考へられるに至つたが為である。言霊の信仰が、近世末期の国語の学問的研究によつて認証された訳である。(時枝(一九四〇)一八九頁)

音義言霊論が幕末国学の中で重要な位置を占める思潮となつたことを示したものが、そうした研究は明治以降になつてどのような評価を受けるに至つたのかについて考えると、先の保科の言及は、時枝の評価と少し異なつた意味を持つ。つまり、保科の場合は、国語学「衰微」の實例として音義言霊論が取り上げられているのに対し、時枝の場合は、その意義を積極的に捉えているとも考えられるのである。時枝は、音義言霊論(『国語学史』では「音義言霊学派」)について、「それが若し、到達すべき極点にまで至つたならば、そこから更に新しい言語に対する観点が生まれただであらうが、その暇なくして西洋言語学がこれに取つて代ることになつたのである。」(時枝(一九四〇)一九二頁)と述べている。「更に新しい観点」が時枝の主張する言語過程説かどうかはさておき、音義言霊論への評価は、国語学の内部においても、一定程度存在することが確認できればよいだろう。

ところで、こうした評価は時枝に限らず、すでに上田万年の主張の中にも見られる。一八九九(明治三二)年刊行の大矢透『国語遡原』に寄せた上田の序文(『国語遡原序』、後に一九〇三(明治三六)年刊行の『国語のため 第二』所収)では、具原益軒の語源常感説や新井白石の歴史的語源研究、富士谷成章の二元分殊論の他、「篤胤守部残夢元盛等が種々に解釈を試みたる一音一義説^⑤」や鈴木服や物集高世の「オノマトポエチック説」について触れ、「それ〱一種異様の光彩を、語学史上に放てるもの

にあらずや」(安田校注(二〇一一)三二六頁)と高い評価が与えられており、一音一義説としての音義言霊論についても明確な言及がなされている。

そのようにして見ると、国語学史的な「衰微」の意味が重要となつてくるが、それは「国語」の編制において最も重要な「辞書」の編纂と、西洋の歴史言語学的批判に耐えうる「音韻」と「文法」の研究の有無にあったと見てよい。つまり、国語学の「隆盛」とされる時期(『国語学小史』では「第三期」)には、本居春庭や鈴木服、東条義門らによつて精緻な活用研究が展開し、石川雅望が『雅言集覧』を編纂するなど、いわば西洋言語学に遜色無い研究が展開されていたという認識である。それが幕末になると、世情の喧しさとも呼応し、一転して「衰微」の時代となる。そして、その時代を色濃く反映する研究内容が音義言霊論であつたとすれば、明治以降の評価は自ずと確定してしまふだろう。

しかしながら、そうした評価のあり方と音義言霊論の実態とは、必ずしも一致するものではない。むしろ、子細な検討を経なかつた分、過大・過小のいずれかに偏つた、極めて歪な観点が跋扈しているとも限らない。国学における音義言霊論としての展開は、それ自体どういう意味を持つのかを、今一度立ち返つて検討してみる必要があるように思われる。

三、国学における音義言霊論

そもそも言霊についての言及は、『万葉集』における「神代より 言ひ伝て来らく、そらみつ 大和の国は 皇神の 厳しき国 言霊の 幸はふ国と 語り継ぎ 言ひ継がひけり(以下略)」(神代欲理 云伝久良久 虚見通 倭国者 皇神能 伊都久志吉国 言霊能 佐吉播布国等 加多利継 伊比都賀比計理)(巻五・八九四、山上憶良「好去好来歌」)や「磯城島の 大和

の国は 言靈の 助くる国ぞ ま幸くありこそ (志貴嶋 倭国者 事靈之所佐国叙 真福在与具) (巻一三・三二五四、柿本人麻呂「柿本朝臣人麻呂歌集 歌(反歌)」) といった例を引くまでもなく、古代から存在する。しかしながら、それらを本格的な言語論として展開するようになったのは、近世以降のことと見てよいだろう。契沖の『万葉代匠記』における「言靈(ことたま)」の語釈等も注目に値するが、そこに日本語の音、特に五十音図を絶対視することで、独特の言語論が展開するようになったのは、賀茂真淵に拠るところが大きい。真淵は『語意考』(一七八九(寛政元) 年刊)において、「五十聯音」(イツラノコエ)の妙用を以下のように説いている。

これの日いつる国は、いつら(五十聯)のこゑのまにくことをなして、よろつの事をくちづからいひ伝へるくに也、その日さかる国は、万つの事にかた(絵)を書てしるしとする国なり、かれの日のいる国は、いつらはかりのこゑにかたを書て、万つの事にわたし用る国なり、(中略)そもく此国の上つ代より用来りて、定め有ことばの分ちは横の音にこそあれ、(中略)しかあれば、是ぞ此ことばの国の天地の神祖かみろの教へ給ひしことにして、他国ひとくににはあらぬ言のためなることを知へし、(中略)故かれいにしへより言靈の幸はふ国ととなふなり。

(久松監修(一九八〇)一二四頁〜一二五頁)

こうした五十音図の神聖化と、五十音として整備されたあり方そのものに言語の妙用を見出すことは、本居宣長にも受け継がれている。

三、一、本居宣長の言語論

賀茂真淵は、ア段・イ段・ウ段・エ段・オ段それぞれを「はしめのことば(初)、うごかぬことば(体)、うごくことば(用)、おふすることば(令)、たすくことば(助)」(『語意考』「ひとつ」というように、各段に對して文法論的な説明を施しているが、宣長も『漢字三音考』(一七八五

(天明五) 年刊)において、「言語ノ精微ナル国」の例として五十音図と活用との関連を以下のように述べている。

皇國ノ古言ハ五十ノ音ヲ出ズ。是レ天地ノ純粹正雅ノ音ノミヲ用ヒテ。濶雜不正ノ音ヲ厠あヘザルガ故也。サテ如此ク用ル音ハ甚少ケレドモ。彼レ此レ相連ネテ活用スル故ニ。幾千万ノ言語ヲ成ストイヘドモ。足ザル事ナク尽ル事ナシ。ソノウヘ一言ノウヘニモ亦活用アリテ。仮令バ言思ノ如キハ。ハヒフヘト転用シテ。イハムイヒイフイヘ。オモハム オモヒ オモフ オモヘト活キ。往還ノ如キハ。往ハカキクケ。還ハラリルレト転用シテ。ユカムユキユクユケ。カヘラムカヘリカヘルカヘレト活ク。(中略)千言万語各皆其ノ例格違フコトナシ。又言ヲ連ネテ語ヲナスニ。ハモゾコソテニヲヤカム等ノ辞アリテ其意ヲ分ツ。凡テ如此ク。活用助辞ニ因テ。其義ノ細ニクハシク分ル、事甚タ妙ニシテ。外国ノ言語ノ能ク及ブ所ニ非ズ。凡ソ天地ノ間ニ。カクバカリ言語ノ精微ナル国ハアラジトゾ思ハル。

(「皇國言語ノ事」大野編(一九七〇)三八二頁〜三八三頁)

「いはむ、いひ、いふ、いへ」といった活用カの存在や、「は、も、ぞ、こそ、…」などの助辞カの存在は言うに及ばず、五十音図によって示される「皇國ノ正音」は、些かの混じりもない「純粹正雅」なものであるとされる。また、その美しさは同じく『漢字三音考』において、次のようにも称えられている。

サテ如此尊ク万国ニ上タル御國ナルガ故ニ。方位モ万国ノ初二居テ。人身ノ元首ノ如ク。万ノ物モ事モ。皆勝レテ美キ中ニ。殊二人ノ声音言語ノ正シク美キコト。亦復ニ万国ニ優テ。其音清朗トキヨクアザヤカニシテ。譬ヘバイトヨク晴タル天ヲ日中ニ仰ギ瞻ルガ如ク。イサ、カモ曇リナク。又単直ニシテ迂曲レル事無クシテ。真ニ天地、

間ノ純粹正雅ノ音也。

〔皇国ノ正音〕大野編（一九七〇）三八一頁〜三八二頁

そして、こうした言語の美しさは、その「こころ（心・意）」と「こと（事）」とも一致するとされる。すなわち、『古事記伝』で説かれる「意と事」とは皆相称する物とする論である。同趣のことは『うひ山ぶみ』の一節にも、以下のように述べられている。

まづ大かた人は、言と事と心と、そのさま大抵相かなひて、似たる物にて、たとへば心のかしこき人は、いふ言のさまも、なす事のさまも、それに應じてかしこく、心のつたなき人は、いふ言のさまも、なすわざのさまも、それに應じてつたなきもの也、又男は、思ふ心も、いふ言も、なす事も、男のさまあり、女は、おもふ心も、いふ言も、なす事も、女のさまあり、されば時代々々の差別も、又これらのごとくにて、心も言も事も、上代の人は、上代のさま、中古の人は、中古のさま、後世の人は、後世のさま有て、おのおのそのいへる言となせる事と、思へる心と、相かなひて似たる物なるを、今の世に在て、その上代の人の、言をも事をも心をも、考へしらんとするに、そのいへりし言は、歌に伝はり、なせりし事は、史に伝はれるを、その史も、言を以て記したれば、言の外ならず、心のさまも、又歌にて知ルべし、言と事と心とは其さま相かなへるものなれば、後世にして、古の人の、思へる心、なせる事をしりて、その世の有さまを、まさしくしるべきことは、古言古歌にある也、

（大野編（一九六八）一七頁〜一八頁）

ここで注意すべきは、「古の人、思へる心、なせる事」は、「古言古歌」に現れているのであって、後世のものではないという点である。「漢意」に泥んだ後世からの理解ではなく、あくまでも「古言」そのままに立ち返ることの重要性を、宣長は頻繁に説いている。そして、このことは「古

言」と「今言」（今の世の言葉）との相違という意識を示したものに他ならない。これを古文辞学派の影響と見るのかについてはさておき、古言に対する精緻な研究の背景には、今言からだけでは「古の人、思へる心、なせる事」を窺い知れないという観点が存在していたと見るべきであろう。その意味で、宣長の著述から音義説と呼べる主張を見出すは大変困難である。それは、後世の（特に幕末の音義言靈論者による）音義説に多く見られる、今言からの類推をもとにした演繹的な確定作業とは異なるからである。この点は、宣長の没後門人と称した平田篤胤と、大きく立場を異にする点であると言える。

三・二・平田篤胤の言語論

平田篤胤の言語論は、言語学的評価は別として、極めて精緻な体系に基づいて構成されている。古事記や日本書紀といった「古史」の「本辞」（『古き辞書』）として著わされた『古史本辞経』において、言葉は「必ず二言の語に極りて、其の語凡で二千二十五言」であるとされる。結果として「合せて二千五百言の中に、皇国に是なき、下に阿行の从ふ二百二十五言と、上に良行のつく二百五十言と、合せて四百七十五言を除けば、二千二十五言」（平田篤胤全集刊行会編（一九七七b）五八頁）ということになるが、『古史本辞経』にはこれらの一覧が、阿行から良行（篤胤の説では和行と良行が逆）に至るまで網羅的に示されている。『古史本辞経』の説については、村岡（一九五七）において「（一）五十音図の淵源は神字にあり、応神天皇の頃に整理したものであること。」「（二）五十音図の道理は万国の言語の根本であること。」「（三）五十音図の原理は天地初発之時の神代伝説の展開に基づいていること。」「（四）本辞の間に存する数的関係が、中国古典（易）の九宮易咸の道理に符合すること。」「（八九頁〜一九三頁）の四点に整理されているが、演繹的ながらも精緻な体系が

構築されている様が窺えよう。^⑦

また、言語の生得的な側面については、次のように説かれている。

抑々阿は開音の初めにこそ有れ、音韻の根本には非ず。其の由は何と云ふに、人恒に口を開きて在るものに非ず。唇を合せ、口を閉るが常なるを、其閉たる内に、自然に宇声を含むこと、上に云ふが如し。(中略)是諸声の分り出づべき元つ声なるが故に、嬰兒の生れて初声を揚るに、其の音宇阿々と聞ゆめり。

(平田篤胤全集刊行会編(一九七七b)四三九頁)

これは母音「宇(ウ)」を基軸とした、五十音図の成立の端緒を示したもののだが、仏教における阿字観を例に出すまでもなく、どの母音に着目するのかが、独自性や優位性を示す上からも、音義説にとっては大変重要なものであった。特に篤胤の場合は、「ア(ト)―天津国、イ(ト)―天八衢、ウ(ト)―顕国、エ(ト)―泉平坂、オ(ト)―泉津国」(なお(一)内は篤胤が重視した神代文字を示す)というように、天地生成の様が五十音図に仮託されており、むしろ、そうした説明を可能にする原理として、五十音図が見出されたとも言える。

さて、『古史本辞経』における次の一節は、時枝誠記が言語過程説を主張する際に、多くの所で言及しているものであるが、これは篤胤の言語観を直截に示している点で極めて重要である。

さて言語は、声音より起ること素にて、其の五十聯の声音に、各自然に意あり、象あり、形あり。其は人の世に経る、事わざ繁き物なれば、見る物聞く物につけて、情その中に動きて、其の声種に発る。然るは物有れば必ず象あり。象有れば必ず目に映る、目に映れば必ず情に思ふ。情に思へば必ず声に出づ。其の声や、必ず其の見る物の形象に因りて、其の形象なる声あり。此を音象と謂ふ。

(平田篤胤全集刊行会編(一九七七b)四八八頁)

「形」や「象」、「意(情)」といったものの共通性を極限に推し進め、それを「声音」という五十音図の原理に従って統合させるといふ在り方は、究極的に「形象なる声」すなわち「音象」へと収斂していく。さらに「阿」の五声に、各々此れ等の象ありて、良行までに、其義の及べるが故なり。(平田篤胤全集刊行会編(一九七七b)四四四頁)というように、五十音図の行との関連へと及べば、音義言霊論の根幹とも言える音義説の完成へと繋がっていく。その説明は、次のように発音段階で抱かれる語感に基づいている。

其の音象の概要を云はむに、加良理としたる物を見れば、牙口罅の加良理とせし所に響きて、加良理と聞ゆる音あり。佐良理としたる物を見れば、齒舌の佐良理とせし所に触れて、佐良理と聞ゆる音あり。多良理としたる物を見れば、舌上の多良理とせし所に響きて、多良理と聞ゆる音あり。奴良理としたる物を見れば、舌面の奴良理とせし所より、奴良理と聞ゆる音を生し、比良理としたる物を見れば、唇軽の比良理とせし所に響きて、比良理と聞ゆる音をなし、牟良理としたる物を見れば、牟良理としたる所に触れて、牟良理と聞ゆる音を生ず。此れ等を以て、其の主旨を弁へ知べし。

(平田篤胤全集刊行会編(一九七七b)四八八頁)

ある意味で、発音時の舌の位置に着目した「調音点」の確認だとも言えるが、基本としては、良(ラ)行の五声が形象を助けるということであり、実際、篤胤の示す五十音図はワ行とラ行が逆になっている。さらに「阿行―大、加行―旋、左行―爰、太行―聯、奈行―滑、波行―奮、麻行―聚、夜行―動、和行―麗、良行―潤」というように、子音を基軸とした音義が示されている。この、言語学で言うところの「sound symbolism」に似た主張は、先述の「それが若し、到達すべき極点にまで至つたならば、そこから更に新らしい言語に対する観点が生まれたであ

らう」(時枝前掲)という時枝誠記の評価に、最もふさわしい箇所であると言ふことができるだろう。

しかしながら、一方で、篤胤は『伊吹於呂志』において、外国語音の不純さを次のように諧謔的な表現で解説している。

さてまた世の生儒者等、此美しき皇国語をば用はず、とかく戎語で、物云ひたがる事ぢやか、是も先師本居先生の、漢字三音考と云ふ書を著はして、夫に具に論置れましたが、実に鳥獣の音韻に同じことで御座る。(中略)下々の唐人どもに至つては、入りくんだ事でも談ずるときは、実に騒々しくて、彼びいんく、ぱあんくを喧ましく云のぢやから、とんと駄や割葦の囀るやうで、夫も解らぬと、立て掴合ひなども致すさうで御座る。如何にも古くより、戎と云の冠辞に、さへづるや、とかけて云たは、尤なことで御座る。偕またオランダなどの言語は、とかく、舌と顎に触て出る音が多くて、譬へば、其云ひざまが、ウエツ、フェ、ルエ、とか、ナチウ、リュ、と云たやうに、をかしく、くもり曲つて、穢らしい。其外の万国も、みな是に準へて知るが宜で御座る。

(平田篤胤全集刊行会編(一九七八)一二〇頁―一二二頁)

夷狄の言葉を禽獣の声と看做すことは、漢籍由来のものとも言えるが、皇国の言語の美しさと外国語の不純さとの対比は、ある意味において国学者の共通理解と言えるものであった。ただし、篤胤にあつては、そこに講説という「語り」の中でそうした見解を増幅させ、普及にまで及んだという、メディアの観点に注目する必要があるだろう。これは平田派における書籍の出版・流通のあり方へと通じる観点であると思われる。

三三三 富士谷御杖の言語論

なお、音義言霊論の普及という点に関係して、富士谷御杖についても

少し触れておくこととしたい。「倒語は、いふといはざるとの間のものにて、所思をいへるかと思れば思はぬ事をいへり、その事のうへかと思ればさにあらざる、是倒語の肝要なり、」(『古事記燈』「大旨上・言霊弁」という「倒語」の説で著名な御杖の主張について、三宅(一九四一)では以下のように簡潔にまとめられている。

凡そ所思のままに言行にいづる時は必ず時宜を破るものであるから、所思を為に出でじとするには、まずその源である偏心を神道を以て和むべきである。而も偏心が抑ふるに激して一向心となる時、「時宜やぶるべからずひたぶる心おさふべからぬ時」、ひたぶる心・時宜二つながら全うする道が歌道である。ひたぶる心・時宜二つながら全うするためには、ひたぶる心のそのままの表現は避けられねばならない。而も止む事を得ずして是を倒語し鬱情を言外に活きたる言霊として表現するに至るのである。(三宅(一九四一)五一頁)

また、こうした倒語説の根幹には、語に対する音義説が存在した。例えば、「てにをは」に相当する「脚結」の精緻な働きに関して、五十音と関係づけながら語法の靈妙さを説いている。『俳諧手爾波抄』には、助辞「なん」に関連して、「ん」の音について次のような説明がなされている。

われ五十音を「経緯弁」とてくはしくとけるにいふがごとく。んは五十音の源にして。口を閉ながらある音なり。すべての音。口をひらかずして音ある事なきに。んのみひとりかくのごとし。んといふおと。その口を開けばうとなる也。五十音の親はうなり。その源はんなり。此故にこれを神音のうとは名づけおけり。これ成元がおもひえたる事なれば。きかん人思ひよるまじき事なれども。今このなををとく因にこれをいふなり。されば此んは。心のうちにして物を分別することをさすとす音なり。俗にも。いはずして合点ゆきたる事ある時。ン、といふをも思ふべし。(中略)ん字そへる詞は。すべ

て心のうちにての形容にして。みする詞なりとしるべし。
 (卷二・詠属「なん」、三宅編(一九七九)四二〇頁)
 また「ぞ」の項は、語の起源と関係させながら、音義と語法とを一致させながら説明がなされている。

凡ぞといふは。もとそれといふ詞をはぶきたる心にて。濁りてぞといふなり。その本義。人の思ふ筋あるに。其うしろの筋へ思戻らせ。その筋をつたはする詞也。にこる心は。わが思ふ意味と同心させんためなり。(中略)今いふ所の本義。五十音より出たるなれば。心あらん人は。ふかく心用ひてつかひしるべし。

(卷三・曾家「ぞ」三宅編(一九七九)四二九頁)

こうした御杖の説は、語法に対する音義的解釈という点で、春庭以降の鈴屋学派(八衢学派)の文法論と大きく異なっていることが窺える。これは、御杖の説が父成章の提唱する「名、装、挿頭、脚結」を継承したからであるが、その解釈を音義説によって展開したところに、御杖の独創性を見出すこともできよう。

しかしながら御杖の学統は、平田派に見られるような広範な展開をもたらさなかった。この点について、管(二〇〇一)は、極めて興味深い総括を行っている。

北辺門の京や大坂の門人たちは、北辺門の和歌や文法を芸道の一つとして学んでいたという一言に尽きる。湯茶や華道を学ぶに等しく、歌舞音曲を身につけるに同じく、北辺門の和歌や文法(四具)を学ぶのである。(管(二〇〇一)五頁)

和歌や文法を芸道の一種とみなすということは、音義言霊論がいわば稽古の項目として存在したということになる。これを、古今伝授といった歌学秘伝的な要素の継承という意味で、京(都)特有の学芸の特質と見るかどうかは検討を要するが、少なくとも、平田派国学の古道論に見

られるような、運動体としての展開を予期させる要素は、御杖の言語論にはほとんどないと言つてよい。音義説という神秘(秘儀)的な解釈な面では共通しつつも、歌学との関係も含めて、その実態については大きな異なりを見せていたという点は、もう少し注目しておいてよいように思われる。^⑤

四・幕末の音義言霊論

幕末における平田派国学の隆盛は、『気吹舎門人帳』における一八〇四(文化元)年から一八七六(明治九)年間までの門人が四二八三名を数え、その内、篤胤没後(一八四三(天保一四)年以後)の門人が三七三三名に至るといふ点を以てしても明らかである。そうした平田派国学者の多くが唱えた音義言霊論とはどのような特質を持っているのか。まず、幕末の音義言霊論を概観するにあたり、最初に、一八四五(弘化二)年刊行の『詞のちかみち』(『語学捷径』とも)を著した鈴木重胤の所論について見ておくことにしたい。

四・一・鈴木重胤

保科は『国語学小史』の中で、『詞のちかみち』を以下のように評している。

此捷径は先輩の研究を抜萃したもので、重胤の研究と見るべき処は、殆んどないと言つて宜からうと思ひます。(中略)成章、宣長、春庭、隆正等の研究から単に抜萃したものであります。(中略)要するに、此捷径は翁の国語に就ての研究と見るべきものではありません。唯音韻の事も、語法の事も、仮字遣の事も、一所に集めて、国語を学ぶ人達の便利を計つたものでせう。ですから、此捷径は今日普通に

行はれて居る文典の濫觴と見ても宜からうと思ひます。

(保科(一八九九)四一七頁〜四一九頁)

明治期に多く著された文典(文法書)は、研究上の新知見を提示したものである以上に、文法教科書としての側面が重視されたものであった。そういった文典と『詞のちかみち』を比較している点は、保科の国語学観を窺い知る上でも大変興味深い。実際、イギリスの外交官であったアストン(William George Aston)が一八七二年に著した“A Grammar of the Japanese Written Language”(『日本文語文典』)には、「I. Uninflected principal words (na)´ II. Inflected principal words (kotoba)´ III. Uninflected subordinate words´ IV. Inflected subordinate words (III. IV.ともに teniwoha)」とした日本語品詞分類の説明の中で、重胤の『詞のちかみち』を参照した旨の記述が見える。

この『詞のちかみち』において独自性が発揮された個所は、やはり音義言靈論に関する記述である。以下に見るように、ア行からワ行に至るまでの音義的解釈法は、篤胤の主張とも細部において異っている。

さて阿行の下に広厚クワウコウといへるは、その行の言ひろくおほきなる意あればなり。加行の下に堅牢ケンラウとするは、その行の言かたき意なればなり。佐行の下に窄小サクセウとするは、其行の言せばくちひさき意なればなり。多行の下に剛直カウチヨクとするは、其行の言剛タケくつよき意なればなり。奈行の下に和順ワジュンとするは、其行の言柔ニユくやはらかなる意なればなり。波行の下に變更ヘンカウとするは、其行の言変ウツり更アラタる意なればなり。麻行の下に渾融コンユウとするは、其行の言物をすべマド円マドむる意なればなり。夜行の下に進前シムゼンとするは、其行の言す、みゆくこゝろなればなり。良行の下に形状ケイザウとするは、此行は諸の言の下にそひて、其こゝろ有アリ入サマ居サマなどのごとく、体用の言の形状ケイザウを表し意を達トホす言在コトアレはなり。和行の下に揉曲ヂウキョクとするは、其行の

言、なよ、かなる意なればなり。これらのおもぶきをよく明らめなば、自然音韻の靈妙オウカラコトダマなむいちじるしくしらるゝものなる。(上巻八丁オ〜九丁ウ)

一五〇

行の音義に関して、篤胤と重胤の説を比較してみると、篤胤の場合は「阿行―大、加行―旋クル、左行―爰スル、太行―聯ツル、奈行―滑スル、波行―奮スル、麻行―聚ムル、夜行―動ユル、和行―麗ツル、良行―潤ツル(和行と良行が逆)」のような擬音的な説明であるのに対し、重胤の場合は「阿行―広厚、加行―堅牢、佐行―窄小、多行―剛直、奈行―和順、波行―變更、麻行―渾融、夜行―進前、良行―形状、和行―揉曲」というように、より語彙的な意味に沿った説明となっている。これを拡散化と見るか精緻化と見るかは立場の相違と言えるが、いわば意義素の抽出にも似た作業を行っている点は注目に値する。これは、観念的作業でありながらも、具体的な雅語がある程度念頭に置かなければ、異例が続出して論が破綻してしまうからである。『詞のまさみち』には、本居春庭の『詞八衢』をはじめ多くの研究が参照されているが、そのことが逆に、音義言靈論を支える契機ともなったとも考えられよう。

四. 二. 富樫広蔭

活用や係り結びに関する精緻な言語研究によって近代以降の国語学の基礎をなしたとされる、いわば歌学的な学統観に連なる国学者においても、音義言靈論は重要な意味を持っていた。例えば富樫広蔭は、言語を「言・詞・辞」に三分類することを述べた『詞玉橋』や『辞玉櫛』によって、国語学史の分野においても高い評価が与えられているが、一方で『言靈幽顕論』(成立年未詳、京都大学蔵本では『言靈幽顕卷』)を著し、「ウ・オ・ア・エ・イ」を基本とした一音一義の音義言靈論を主張している。具体的な音義について見てみると、天之御中主神、高皇産靈神、神皇産

霊神とともに成る「ウ」から第一「ヒラケソムル象」が、次いで「ク」を中心とする第二「ウキアカル象、アキラカナル象（カ）」「キヨク立ノホル象（キ）」「ワケテオクリ出ス象（ケ）」「スホマル象（コ）」、最後は第十一「ト、マル象（ワ、キ、宇、エ、ヲ）」というように、順に五十音が生成されていくという雄大なものである。これは『三大考』『霊の真柱』に見られる天地生成観を音義言霊論とを融合させたものである。篤胤の言語観に基づけば、両者の融合は必然ではあったものの、それを図示するところまでには至らなかった。その意味において、広蔭の説は格段の展開であるとも言える。つまり、音義説が天地生成の枠組みにおいて、言語起源論として明確に図示されるまでに至ったということである。

また、精緻な言語研究と音義言霊論が、国学者個人の中で矛盾することなく併存可能であったということは、逆に近代以降の国語学的知見が、国学の知見を恣意的に分断していたことの証左ともなるだろう。下二段活用動詞（「蹴る」）の存在を最初の言及した、林圀雄の『詞の緒環』（二八三八（天保九）年刊）についても、用例の収集という、後には国語学的とされる手法とともに、神意を彷彿とされる整然とした活用体系への志向の結果である点を無視することは出来ない。ちなみに、賀茂真淵の言霊説を発展させた『皇国之言霊』（一八二五（文政八）年奥書）では、篤胤の主張とは異なり、「あ」の音を天地自然の万の音声の始の音として、ア行を重視している¹⁰。

四・三・ 高橋残夢

さて、幕末における音義言霊論の主流派と言えるのは、平田派国学者であることは間違いないが、当然のことながら、彼らが全てであったわけではない。例えば、高橋残夢なども幕末の音義言霊学者として取り上げられることが多い。残夢については国語学史での扱いもそれほど多く

ないが、香川景樹門下の歌人として桂門十哲に数え上げられるなど、近世歌学の分野では著名な人物である。保科は、「此人の著書は多くは、言霊の理想を本として説いたものですから、或点は言語学の方よりは、寧ろ哲学の方から研究したら面白からうと思はれるところがあります。」（保科（一八九九）四四四頁）と評している。哲学の方からの研究とは、すなわち言語観・言語思想の研究ということであり、例えば、鈴木眼の『雅語音声考』（二八一六（文化一三）年刊）に見る言語の写声的起源説的な主張を、ヘルダー（Johann Gottfried von Herder）の言語起源論と対比するような見方が、長連恒『日本語学史』（一九〇八）や福井久蔵『国語学史』（一九四二）といった、後の国語学史研究でもしばしば見られる。

残夢の音義言霊論については、管（一九九三）に詳しい記述があり、拙稿（二〇一一）でも少しばかり言及したことがある。清音・濁音を合わせた七十五音図をもとに、「あは頭はれ出づるの霊、頭はるゝ義、頭はすの詞、五音の源、喉音未言なり。霊は音の味也。句ひ也。あの声は頭出の味あり。句あり。」（『言霊之宿』天保七（一八三六）年成、引用箇所は保科（一八九九）四四六頁～四四七頁による）のように、神秘的な音義説を展開している。

また、こうした音義説については、いわば流派に近いものも存在したらしい。『国語本義』（天保一四（一八四三）年成）の中で、残夢は「又近世言霊を唱ふる人こ、かしこに聞ゆれと。言語名義の上はいはずして。太占水莖フトマキミツクキなど怪しき業をつくり出で。世の人欺アザムくか故に。心ある学者は中アサケくに嘲り笑ひて。耳にも触ず又悲しむへし。」（惣論、引用箇所は管（一九九三）一八頁による）というように、太占・水莖の説について「世の人を欺く」と痛烈に批判している。太占は龜卜伝来以前の古代占法を指すが、幕末においては本田親徳の鎮魂帰神の法など、神道霊学（近代の神道家、友清歆真の語として）的な要素が強いものとして表れている。また

水荃は、『言霊或問』（天保五（一八三四）年成）を著した中村孝道の言う「水荃文字」を指すものと見られる。こうした言霊学としての展開は、その後、望月幸智、五十嵐篤好、大石凝真素美らへと継承されていくことになるが、それらは、完全に国語学の範疇を越え、いわばアカデミズムとは異なる存在として、復古神道系の宗教世界での話となっていく¹³。その範疇を越えた際たるものが、いわゆる「神代文字」の論である。

五. 神代文字をめぐる

漢字伝来以前から日本に文字が存在したとされる、いわゆる「神代文字」の論については、山田（一九五三）を引くまでもなく、国語学的に見て完全に否定されるものである。ただし、幕末において、神代文字論がある種の隆盛を極めていたことは間違いなく、鶴峯戊申の『鍔木文字考』（二八三八（天保九）年刊）や『嘉永刪定神代文字考』（一八四八（嘉永元）年刊）に見える「天名地鎮（あないち）」文字に関する論や、大國隆正の『神字小考』（一八四〇（天保一一）年成）、また、『神字日文伝』所収の文字を整理した岩崎長世の『神字彙』（一八六五（慶応）元年刊）のように、多く言及が見られる。それゆえに、国語学の成立した明治以降にあっても、神代文字論の存否について、何らかの言及する必要があったと言えるのである。例えば、上田万年は国語学史の講義において、わざわざ神代文字論についても触れ、「神代文字ハ」一二世紀、一三世紀時代ノモノナリ。証拠物件ハ、original text ナクシテ、故意ニ作りタルモノナリ。神代文字ハ言語ヲ represent セズシテ、意図的ニ成レリ。又「日文」ナルモノハ、甚ダ疑ハシ。」（古田校訂（一九八四）二〇六頁）と、その存在を全面的に否定している。明治二〇年代では、落合直澄が『日本古代文字考』（二八八八）において、さまざまな神代文字を紹介しているように、神代

文字の存在を信じてやまない国学者が一定数存在したことも関係している。科学的な言語研究の進展のためには、単に荒唐無稽なものとして黙殺する訳にはいかなかったのである¹⁵。

ところで、神代文字論については、すでに山田（一九五三）で言及されているように、平田篤胤の古道論の影響が色濃く反映している。篤胤が著した『神字日文伝』（二八一九（文政二）年成）には、多くの神代文字を博搜した結果、「多氏五画（トエー十トウ・おい・え・あ）」と「余許九画（す・ふ・つ・る・ぬ・く・ゆ・む・う）」からなる「日文四十七音」（「日文」あるいは「阿比留文字」とも）を真の神代文字とした。伝来については「右の日文四十七字は。行文と有れど真字と見ゆ。此を伝へたる阿比留氏は。対馬ノ国ノ卜部と有れば。天ノ児屋根ノ命の裔なること疑なし。」（平田篤胤全集刊行会編（一九七八）一九五頁）として、対馬との関係に注目している。この日文が、諺文（ハンゲル）と極めて類似していることは一目瞭然であるが、これについても篤胤は、次のように神代文字が朝鮮へ伝来したとする、いわば逆の観点から反駁している。

さて彼の地には。かく元より国字の無かりしかば。当昔服従始し間より。皇国文字を伝へ賜はりて用ひけんが。それ朝鮮の世宗が時まで。をろく存り伝はりけむは。然も有るべき事なり

彼の地は、元より訓語の国なれば、漢字よりは、早く皇国字を用ひ習ひけむこと、実にも尤なる事にざりける、故それに原づきて。諺文を製れること。更に疑なき物なり。

（平田篤胤全集刊行会編（一九七八）二一〇頁）

篤胤の主張する「母韻（「母音」に相当）」と「父韻（「子音」に相当）」を字母とする「日文」は、五十音図の絶対視のもと、表として完全な形を示すことになる。逆に言えば、この「日文」でなければ五十音図は十分に説明できないのである。このことは、日本語の音韻を五十音図によつ

て示す場合、アルファベットを用いることにより説明がし易くなることと似ている。ハンゲルも、子音と母音の字母の組み合わせによって構成されている以上、五十音図の説明に適した文字の一つであったと言える。

さらに、篤胤は『神字日文伝』の附録『疑字篇』において、全国に見られる神代文字を取り上げ、考察を行っているが、興味深いのは、篤胤自身が真字であるとした「日文」以外に、秀真文字（「ホツマ文字」といった他の神代文字も、幕末に至るまで多くの所で言及されている点である。ホツマ文字を記した『秀真政伝記（ホツマツタエ）』（一八四三（天保一四）年刊、内閣文庫本）を検討した吉田（二〇一八）では、『秀真政伝記』には「日本の近世期までの神仏習合思想や和歌史が踏襲」（九頁）されていると指摘し、ホツマ文字も「神の形を表す象形文字的な意味を持つており、神の性を表している」（八八頁）ように、梵字以上に神秘性が高められているとしている。すなわち、神代文字論の背景には、吉田神道における反本地垂迹説や、歌学秘伝に見られる和歌と神意との関係についての主張も垣間見られるということである。なお、荷田春満から賀茂真淵、本居宣長に至る学統を重視した篤胤は、以下のように歌学や仏教については極めて冷淡であった。

今の世に古学と称して。哥道を立る徒。蟻の如く多かるに。其ノ先生たちの伝を物するに。契沖。縣居。鈴屋をし。三哲など称して。此ノ大人の事をば。都に称する者なきは。其ノ徒みな哥作者にて。道の本義を知らざる故に。哥学の方より然は思ふにぞ有ける。契沖は仏者にし有れば。然ても有りなむ。縣居。鈴ノ屋の二翁をし。哥もて称せむは。其ノ本意に違ふことなり。我が党の小子。よく此旨を思ひて。荷田ノ大人の御蔭をも。常忘るまじき事なり。

（『玉櫛』卷九、平田篤胤全集刊行会編（一九七七a）四八八頁）
ここに、歌学の影響を受けた神代文字と対比してみると、幕末におい

てはどのような神代文字が信憑性を以て受け入れられたのかという、継承と展開の意味を考える必要も出てくるだろう。なお、この点については今後の課題である。¹⁶⁾

六。「国語学」への道—おわりにかえて—

明治期以降の国語学については、すでに拙稿（二〇一一）でも触れたが、権田直助等の失脚と洋学派の台頭に代表される情勢下、歌学的学統観に連なる国学者が主流となり、ひいては「国文学」や「国語学」の成立へと繋がっていったことが窺える。その意味で、保科のような国語学史編述の態度は、明治期の国語学に対する認識そのものを示している。それは、時枝誠記に至るまでの国語学史のあり方を規定するものでもあった。

一方で、「国語学」では扱われない語源の解釈等に目を向ければ、それらの解釈の多くが幕末・明治期における音義言霊学派国学者の言語研究の中に見出される。しかも、現代においてもそれは多様な形で展開されており、新宗教系の教義に取り入れられることもある。見方によれば「言霊」は現代にも息づくものと言えるかもしれない。この点について川村（一九九〇）は、次のような極めて示唆的な見解を示している。

「言霊」という、現代ではすっかり死語となつてしまつた言葉と出会つたのは、神秘的言語観、言語の絶対主義が衣装を変えて私たちの社会に現れていて、それはどんな術語を使おうと「言霊」という言葉と本質的には変わりが無い、ということに気がついたからである。小林秀雄、江藤淳、吉本隆明といった現代の文芸批評家たちの言語観の本質的な部分に、「言霊」と呼んでよいような言語についての思惟が伏在しているのではないか。

（川村（一九九〇）三〇七頁～三〇八頁）

また、鎌田(二〇一七)では、更に一歩進んで、言霊思想の淵源からその宗教的意味について検討がなされている。拙著(二〇〇二)において、日本における言語研究の歴史は、言語学的な検証の下、その系譜に位置付けられるものが「日本語学史」であり、そこから横溢するものや、言語研究のあり方を担保する「国語学(日本語学)」といった学知の成立を見る場合には、それを「学史」に押し込めるのではなく「日本言語思想史」として捉えるべきであるとする旨を述べたが、幕末国学言語論は、まさしく言語思想的検討を要する、重要な意味を持っているように思われる。それは、近代学知が削ぎ落したものの意味である。

藤岡好古の尽力によって刊行された『音義全書』は、一九一三(大正二)年に神宮奉賛会から刊行された、明治期の言語学者堀秀成の、いわば遺書とも言える集大成的な著述である。この書には、上田万年が次のような序を寄せている。

要するに対象の御代の我等語学者は、かゝる先輩の研究の績を基礎として、各般の学問の光の下に新しき組織を構成し、先輩の力と吾等の力とを合一させる責任があると思ふ。

(神宮奉賛会編(一九一三)「序」三頁)

ここに、その後の上田と神宮皇學館との関係などを横に置くと、「新しき組織」の内実が窺えるかもしれないが、それ以上に、比較歴史言語学の成果を十分に反映した科学的な「国語学」が、大正に至って確立されたという前提があつてこそその言である点を忘れてはならない。音義説は国語学(言語学)的に見て、いわば放逐可能な状態であつた訳である。実際、東京帝国大学や京都帝国大学において、音義言霊論を国語学の問題として扱った研究は存在しない。これは、国語学が(西洋)言語学史的に位置付けられることが可能となつた、ということを意味している。

ところが、近年の音声学研究では、サピア(Edward Sapir)が注目し

た、語を構成する音がもつ象徴的性質に起因する「音象徴(sound symbolism)」の研究が盛んである。例えば、浜野(二〇一四)では、日本語のオノマトペにおける「CVタイプ」の語根に現れる母音の基本的な音象徴」として、「…線状、細さ、高音、緊張」「e…野卑」「a…広い、平ら、広範囲、目立つ」「o…目立たない」「u…突き出る」(四六頁)が挙げられている。また、動物名称には共感的音象徴が大いに関係しているといった報告も存在する(バーリン(篠原・川原訳)(二〇一三)など)。印欧語比較歴史言語学における音韻変化法則の絶対視や、ソシユール言語学における言語記号の「恣意性」という前提のもとでは、音象徴研究など前近代的であるとした見方が明確に存在していた。イエスベルセンなどは「何時の時代にあつても素人語学者が好んで抱く概念」(市河・神保訳(一九二七)七五〇頁)とまで述べている。荒唐無稽であるが、一概には否定できないもの、それが音象徴に対する認識の実態であつたと言えよう。だからこそ、明治以降の言語学流入により成立した「国語学」においては、それまでの音義言霊論を非科学的と排斥する必要があつたのである。近年の音象徴研究の特徴は、実験音声学や心理学、認知科学といった、より科学的な手法を重視する立場からの再検証にあるが、それらの研究では、科学的観点からもあつて、前近代との継承性は意図的に排除されている。実際、秋田(二〇一三)では、音象徴の研究史について「実質的な研究史の出発点は、心理学的・言語学的関心が高まつた1920年代に据えられることが多い。」(篠原・宇野編、三三三頁)としている。従つて、現在のところ、音義言霊派の主張を実験音声学的に検証するといったことは管見の限り確認できないが、今後のことは分からない。国学言語論の科学的分析と言え、復古的風潮に同調するかのように見えるが、いみじくもソシユール言語学の受容とその超克に、例えば音義言霊論が関係するとすれば、ことは言語思想史的に見て重要な観

点を提示しているのかもしれない。その答えを出さずにいる限りにおいて、本稿は、日本語学史と日本言語思想史との間を半ば鶴的に彷徨した結果の、拙い目論見であった。

注

- ① 例えば、伊藤（二〇〇一）には、「学者としての上田さんに気の毒なことが二つある。一つは、東大で講義した国語学史を、弟子の保科孝一君がそのまま自分の『国語学小史』にして出版したことだ。もう一つは、早稲田で講義した言語学を、宮田脩が『通俗言語学』と題して出版したことである。もっともあとの方の件は人の噂話だから、確実ではないが、ありそうなことのように思われる。」（四〇頁）という指摘がある。
- ② 本稿に関連して、野口（一九九三）には「幕末国語学のうち音義言霊派は、あとひたすらその急傾斜を転がり落ちるだけであった。」（二九九頁）という指摘の下、国学における五十音図のもつ意味について鋭い検討がなされている。さらに近年では、岩根（二〇〇八、二〇一三、二〇一五）のように、国学言語論に関する重要な指摘を含んだ研究が注目される。
- ③ 鶴峰戊申、物集高世については、第二期（橘守部没まで）最終項の左ページ注記（古田校訂（一九八四）一七六頁）に、白井寛蔭、新井守村、岡本保孝については第三期最終項の左ページ注記（古田校訂（一九八四）一七七頁）にそれぞれ記載されているが、これが上田の講義内容であるのか、それとも筆録者である新村出が調べたものであるのかは不明である。
- ④ その言でいけば、同じく帝国大学文科大学教授の本居豊頼の父である本居内遠（一八五五年没）も言及すべきことになるが、内遠には語学関係の著述に乏しかったことが関係していたのかも知れない。
- ⑤ ここでいう「元盛」については未詳。なお安田校注（二〇一一）では「野山元盛（『瑞組木志遠裡』）か」としている（四一七頁）。
- ⑥ 宣長と堀景山をはじめとする古文辞学派との関係については、吉川（一九七五、一九七七）や日野（二〇〇五）に詳しい。
- ⑦ こうした五十音図を基盤とする普遍言語論は、西洋語をも包含して説明し得る融通無碍さを兼備する。従って、鶴峰戊申や大國隆正の著述に見ら

れる蘭学由来の要素も、普遍言語への志向という点では何ら奇異なものではない。例えば、鶴峰戊申の蘭文典撰取についても、西洋言語学（蘭文典）の影響という観点からだけではなく、国学言語論側からの拡張として見る必要がある。

⑧ この点については遠藤（二〇〇八）を参照。また、近世社会における国学の位相を分析した桂島（一九九九、二〇〇五）の議論は、国学言語論を見る上でも極めて参考になる。

⑨ これは橘守部の音義説についても言えることであり、守部の音義説がその後どのように継承されていったのかについては、実際のところ、あまり明らかではない。『五十音小説』（一八四二（天保一三）年成）には、「弘法大師の真跡のいろは仮字の体を見て、つらつら按ずるに、もと漢字を借て、さて其字形は、漢の筆法に拘らず、各其音色の本体に随て、製し給へるもの也。此に其事を一二いはゞ、先阿和などの如く、円体なる音には、其形をあわとやうに円く作り、知都等のつぽやかなる音には、ち、つとやうに、少く丸く作り、細長き音には、しと作り、纏はり廻れる音には、む、め、もとやうに作り、口鼻を兼て、出安き音には、うとやうに作り、牙の間隙より出る音にはいとやうに作り、唇の反て出る音には、へとやうに作り給へるが如し。」（橘編（一九二二）一九七頁〜一九八頁）というように、仮名文字に対する音義的説明が見られるが、これなど文字と音との関係についての捉え方を知る上で大変興味深い。なお、守部の活動と言語観については、鈴木（一九七二）、鈴木（一九五九〜一九八九）を参照。

⑩ 伊東（一九八二）の記述に拠る。

⑪ ただし、直接の言及があるのは初版のみで、以後の版では品詞分類法も異なっている。アストンによる品詞分類法の改変については、金子（二〇一〇）を参照。

⑫ 閑雄については、明治・大正期の熱烈な語源学者であった林麿臣の曾祖父として、むしろ音義言霊学者としての活躍を取り上げられることが多い。

⑬ 明治以降の神道の分野においても、こうした言霊学が主流であったとは言い難い。この点については、近代以降の神道思想をめぐる藤田

(二〇〇七)の議論を参照。

- ⑭ 神代文字については、近代以降の復古神道系新宗教で重要視されることもあり、宗教思想史の観点からの分析も重要であると思われる。なお、百数十種に及ぶ神代文字の全容については、吾郷(一九七六)等が詳しい。
- ⑮ 幕末から明治期における神代文字論者については、三ツ松(二〇一七)を参照。

⑯ 国学者による神代文字批判については、伴信友のものがよく知られている。信友は『仮名本末 附録』(一八五〇(嘉永三)年)において、「世に神代文字なりとて、写し伝へたるが種々あるをみるに、多くは亀卜の灼兆にことよせて、とりぐに作りたるものと見えたり。さるは中むかしよりこのたの、唯一などという神道者などの、みだりに作りたるものなるべく、又それにくひて、えせ人の後に作りたるもありとみえなどして、さらけうけがたきものなり。」(「神代字弁」と、徹底的な批判を加えている。ただし、こうした批判から、信友を「科学的」として称揚してしまうのは、近代主義的な見方に過ぎるであろう。

参考文献

- 秋田 喜美 二〇一三 「オノマトペ・音象徴の研究史」篠原和子・宇野良子編『オノマトペ研究の射程―近づく音と意味―』ひつじ書房
- 吾郷 清彦 一九七六 『日本超古代秘史資料』新人物往来社
- イエス・ペルセン・オットー／市河三喜・神保格訳 一九二七 『言語―その本質・発達及び起原―』岩波書店
- 伊東多三郎 一九八二 『草莽の国学(増補版)』名著出版
- 伊藤 正雄 二〇〇一 『新版忘れ得ぬ国文学者たち―并、憶い出の明治大正―』右文書院
- 岩根 卓史 二〇〇八 「神代文字」の構想と論理―平田篤胤の《コトバ》をめぐる思考―『次世代人文社会研究』四
- 岩根 卓史 二〇一三 「言葉の(始原)とコスモロジー―幕末国学言語論の思想的位相―」『日本思想史研究会会報』三〇
- 岩根 卓史 二〇一五 「大國隆正における〈古言〉論―言葉は後より出てきたるものと知られたり―」『日本思想史研究会会報』三一

- 遠藤 潤 二〇〇八 『平田国学と近世社会』ペリかん社
- 大野 晋編 一九六八 『本居宣長全集第一卷』筑摩書房
- 大野 晋編 一九七〇 『本居宣長全集第五卷』筑摩書房
- 桂島 宣弘 一九九九 『思想史の十九世紀―「他者」としての徳川日本―』ペリかん社
- 桂島 宣弘 二〇〇五 『増補改訂版 幕末民衆思想の研究―幕末国学と民衆宗教―』文理閣
- 金子 弘 二〇一〇 「アストン」『文語文典』改訂の性格『日本語日本文学』二〇
- 鎌田 東二 二〇一七 『言霊の思想』青土社
- 亀田 次郎 一九〇二 『高橋残夢伝』『言語学雑誌』三・一
- 川原 繁人 二〇一七 『「あ」は「い」より大きい?!―音象徴で学ぶ音声学入門―』ひつじ書房
- 川村 湊 一九九〇 『言霊と他界』講談社
- 子安 宣邦 一九九五 『宣長問題』とは何か』青土社
- 子安 宣邦 二〇〇一 『平田篤胤の世界』ペリかん社
- 山東 功 二〇一七 『明治期国学と国語学』釘貫亨・宮地朝子編『ことばに向かう日本の学知―名古屋大学グローバルCOEプログラム―』ひつじ書房
- 清水 豊 一九八九 『平田篤胤の神代文字論』『神道宗教』一三六
- 神宮泰齋会編 一九一三 『音義全書 上・下』神宮泰齋会
- 鈴木 暎一 一九七二 『人物叢書 橘守部』吉川弘文館
- 鈴木 一彦 一九五九―一九八九 『橘守部の国語意識(1)～(9)』山梨大学芸(教育)学部研究報告』一〇～一三、一六、一七、二二、二七、三九
- 管 宗次 一九九三 『幕末・明治上方歌壇人物史』臨川書店
- 管 宗次 二〇〇一 『富士谷御杖の門人たち』臨川書店
- 高階成章編 一九四四 『国学大系二』鈴木重胤集』地平社
- 橋 純一編 一九二二 『橘守部全集第十二』国書刊行会
- 田中 敦子 一九八七 『神代文字考』『国文目白』二七
- 谷 省吾 一九六八 『鈴木重胤の研究』神道史学会

- 近石泰秋編 一九五一 「堀秀成年譜並に著述目録」『芸芸』三・三
 時枝 誠記 一九四〇 『国語学史』 岩波書店
 豊田 国夫 一九八〇 『日本人の言霊思想』 講談社学術文庫
 野口 武彦 一九九三 『江戸思想史の地形』 ぺりかん社
 芳賀登・松本三之介校注 一九七一 『日本思想大系51 国学運動の系譜』 岩波書店
 芳賀 登 二〇〇三 『芳賀登著作選集第六卷 幕末国学の運動と草莽』 雄山閣
 浜野 祥子 二〇一四 『日本語のオノマトペ―音象徴と構造―』 くらしお出版
 パーリン・ブレント／篠原和子・川原繁人訳 二〇一三 「動物名称に見られる共感覚的音象徴」篠原和子・宇野良子編『オノマトペ研究の射程―近づく音と意味―』 ひつじ書房
 久松潜一監修 一九八〇 『賀茂真淵全集 第十九卷』 続群書類従完成会
 日野 龍夫 二〇〇五 『日野龍夫著作集第二卷・宣長・秋成・蕪村』 ぺりかん社
 平田篤胤全集刊行会編 一九七七 a 『平田篤胤全集第六卷』 名著出版
 平田篤胤全集刊行会編 一九七七 b 『平田篤胤全集第七卷』 名著出版
 平田篤胤全集刊行会編 一九七八 『平田篤胤全集第十五卷』 名著出版
 福井 久蔵 一九四二 『国語学史』 厚生閣
 藤田 大誠 二〇〇七 『近代国学の研究』 弘文堂
 古田 東朔 二〇一〇 『古田東朔近現代日本語生成史コレクション第三卷 日本語へのまなざし 内と外から―国語学史一』 くらしお出版
 保科 孝一 一八九九 『国語学小史』 大日本図書

- 三ツ松 誠 二〇一七 「神代文字と平田国学」小澤実編『近代日本の疑史 言説―歴史語りのインタレクチュアル・ヒストリー―』 勉誠出版
 三宅 清 一九四二 『富士谷御杖』 三省堂
 三宅 清編 一九七九 『新編富士谷御杖全集第七卷』 思文閣出版
 村岡 典嗣 一九三〇 『神代文字研究』 岩波書店
 村岡 典嗣 一九五七 『宣長と篤胤 日本思想史研究第三卷』 創文社
 安田敏朗校注 二〇一一 『国語のため』 平凡社東洋文庫
 山下 久夫 二〇〇〇 『平田篤胤・「神代文字」論の主題―生成する〈古代〉像へ―』 『金沢学院大学文学部紀要』 五
 山田 孝雄 一九五三 『所謂神代文字の論(上)(中)(下)』 『芸林』 四・一、二、三
 吉川幸次郎 一九七五 『仁斎・徂徠・宣長』 岩波書店
 吉川幸次郎 一九七七 『本居宣長』 筑摩書房
 吉田 唯 二〇一八 『神代文字の思想―ホツマ文献を読み解く―』 平凡社
 四谷庵月良 一八九七 『文学史料 林圀雄伝』 『帝国文学』 三・一二一

付記

本稿では、参照上の便宜を考え、明治以降刊行の全集等(通行本)から引用を行った。ただし、鈴木重胤や富樫広蔭の著述については、全集等が整備されていないため、写本・刊本から引用している。また、句読点については適宜修正を施し、漢字の多くは通行の字体に改めた。

(大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科教授)